

	<p>として高い意識がみられ、特に PDCA サイクルをふまえた取り組みが行われている。</p>	
<p>Ⅱ 教育課程と学生 支援</p>	<p>①入学・教育課程・学位授与のそれぞれのポリシーが確立・明示されている点が評価できる。さらにこれらの点が各授業科目や行事レベルにまで深められると、さらに評価が高まると思われる。</p> <p>②教育課程について、成績評価を4段階から5段階に改めるなど、常に向上させようとする意識がみられる。</p> <p>③教育課程について、共通教育科目を16単位以上修得することを卒業要件としており、単に免許・資格の取得やスキルの向上だけでなく、社会人基礎力の養成という短大の教育課題が達成できるように工夫されている。</p> <p>④教育課程について、編成の基本方針がしっかりと定められており、それに即した授業科目が開設されている。</p> <p>⑤教育課程について、各学科が独自の方向性を主張するばかりでなく、短大全体の基本方針の改定にあわせた調整がなされている。</p> <p>⑥入学者選抜について、A0 入試では複数回の面接を実施し、学習意欲と可能性が吟味できるようにされている。</p> <p>⑦入学者選抜後の支援としての取り組みが、入学後の学びまで明確に視野に入れることを眼目にして試行錯誤を重ねていることを評価したい。</p> <p>⑧授業担当者間での意思疎通につながる取り組みが積極的である点が評価できる。短大側として仕掛けるものばかりではなく、教員側から自発的に行っているものが含まれていることに発展性が認められる。</p> <p>⑨教務と学生生活を一体化させた事務体系は、学生にとっては「ワン・ストップ・サービス」として利用しやすいと思われる。</p> <p>⑩学生の卒業後評価について、就職先企業への訪問とともに卒業生に対するアンケートを行い、結果を教育内容に生かそうとする努力が伺える。</p> <p>⑪学生支援において、2年生の「ビックスター」が新入生に対する履修計画を援助するといった実際的かつ効果的な支援が行われている。</p> <p>⑫進路支援について、両学科とも高い就職率であることから、組織的な支援が行われていることが伺える。</p>	<p>①授業形態（講義・演習）に関係なく、資格関連科目を除いて開設科目の多くを2単位としている点は、学生の負担軽減につながり、「不公平感」を取り払うメリットもあり、評価できる。実習・演習科目についてもこの措置を進めながら、保育士、幼稚園教師育成面の質の確保がなされていることは高く評価できる。この成果に関わる実証的データを提示しつつ、単位制度問題への一石を投じられることを期待したい。単位互換において問題化する拘束時間と教育効果・教育の質の問題に関わる論点の整理と提言があれば、他大学にとって大いに参考になるとと思われる。</p> <p>②教育課程について、卒業後のキャリア育成といった出口の課題を意識するあまり、単に進路決定のための教育内容にならないように留意する必要がある。</p> <p>③学位授与の方針について、実際の授業を通して学生にどのように示していくかが課題である。</p> <p>④教育課程について、講義・演習・実習の多くを2単位とする中でも、基礎教養や論理的思考などの社会人基礎力に必要な能力の育成を疎かにしない工夫と改善を更に前進させていくことが求められる。</p> <p>⑤成績評価の科目間でのばらつきについて、「秀」を最上位ランクとして創設するシステムの構築において「極端なケースの発生の防止」と「GPA 等成績を利用した学生に対する処遇への反映」への対処が求められる。</p> <p>⑥単位認定の状況について、全体的に「優」が多い傾向が見受けられるため、5段階評価を導入する際には特に厳密な評価の実施を教員に意識づける必要がある。</p> <p>⑦学生の卒業度評価について、就職先への聞き取り調査では教育の改善に役立つネガティブな情報を把握することは難しい点にも配慮しつつ、先方への負担や回収率の低さなどをふまえてアンケート調査の実施を検討する必要がある。</p> <p>⑧学生支援について、近年は基礎学力が不足している入学者が増加する傾向にあるが、それが短大での学習のみならず社会で必要とされる人間力の養成にもネガティブに影響することを考慮</p>

		しつつ、個別指導だけでなく、組織的な学習支援を検討する必要がある。
III 教育資源と財的資源	<p>①教員の研究活動にかかわる諸規程をきちんと整備している点を評価したい。ルールがあることで、教職員間で不公平やブレを感じることなく、研究活動に打ち込むことができることが期待される。</p> <p>②専任教員の教育研究活動について、各学科とも複数の教員による共同研究が行われており、学科の方針に基づいたものであることが伺える。</p> <p>③物的資源について、特にマルチメディア教室や情報処理室の施設、および情報ネットワーク環境が充実しており、現代の社会や学生のニーズに合わせたものになっている。</p> <p>また、無線 LAN 等のシステムがしっかりと整っているなど、情報システムの整備に関しては、非常に進んでいる。クリッカーなどの新たな教材を積極的に導入していることも評価したい。</p>	<p>①専任教員の教育研究活動について、課題にもあるが教育研究活動に関する規定が多く見受けられ、理解や把握が困難であることも推測されるため、理解しやすい形に統合する必要がある。</p> <p>②「研究倫理規程」はあるが、もっと広い意味で、「教職員倫理規程（憲章）」「学生倫理規程（憲章）」のようなものをつくることはできないだろうか。大学という場の特殊性ゆえに、パワハラ・アカハラ・セクハラの類が学内で教職員・学生に関係なく起こりやすい。また、若年層の価値観や行動様式の多元化を考慮したとき共有すべき倫理規範を明確化して、相互に意識を深めることも今後の課題と思われる。本学についても同様の課題を抱えている。</p> <p>③情報システムの整備が進んでいる中での問題ではあるが、学生だけではなく教職員の情報リテラシーやセキュリティ意識の開発がより深められることを期待したい。</p> <p>④財的資源について、国際コミュニケーション科の定員割れは経営面だけではなく、教員の勤務や学生の教育などにもネガティブに影響することが考えられるため、幼児教育科も含めて短大全体として今後の方策を検討していくことが重要である。</p>
IV リーダーシップとガバナンス	<p>①理事長のリーダーシップについて、理事長がカトリック聖心侍女修道会のシスターであることから、建学の精神及び教育理念・目的をふまえたリーダーシップを発揮していることが伺える。</p> <p>②学長のリーダーシップについて、豊富で専門的な経験を有していることから、実際的かつ具体的なリーダーシップを発揮していることが伺える。</p>	
選択的評価基準	<p>①十分な教養科目のラインアップがある。建学の精神を科目として立てている点、そして、特に高等教育でノンフォーマルな学びの機会を提供することへの期待が高まる中、学外活動やボランティア活動を単位化された科目として大学が公式に認定している点を評価したい。</p> <p>②幼児教育科で「初年次教育」と意識化して1年次のプログラムを組もうとしている点を評価したい。課題として掲げられている通り、今後は効果の検証や、日常的な専門教育の授業科目との関連づけを深めていくことを期待したい。</p>	<p>①セミナーのなかに「自分発見」が表現として登場するが、キャリア教育の中で「自分探し」を学生・生徒に求めることのマイナス面が指摘されることもある（「探して見つけるものではなく、自分で経験を重ねて作り上げるものだ」など）ことも考慮しつつ一段の工夫がなされることが期待される。</p>

(2) 育英短期大学について

評価項目	評価できる点	今後の課題
1. 自己点検・評価の基礎資料	①H19年度の第三者評価の評価結果で「向上・充実の課題」としてあげられた「全学的な研究活動の活性化」について、その後、改善するための取り組みを具体的に進めてきた。	①短期大学基準協会が指定している自己評価報告書の構成や書式に早期に対応することが望まれる。
基準Ⅰ 建学の精神と教育の効果	①建学の精神と理念を学ぶ科目として「保育者基礎演習」や「キャリアプランニングⅠ」を新たに設定して実施しようとしている。 両学科ともに1年次、2年次でのゼミ指導が充実し、少人数による指導や、成績や卒業後の進路問題など学生生活の安定に大きく寄与している。 ②建学の精神を確かに学生に伝える方策はどの大学も苦慮すると考えられるが、在学2年間を通じてセミナー科目の態勢が整い、その機会を十分保障していると思われる。 ③欠席がたび重なる学生の把握と支援が組織的に行われ、対策が四者面談など組織的に準備されるなど深刻化しないよう支援体制が構築されている。 ④教員相互の授業参観をFD活動として組織的に行っている。 ⑤授業に関する共通理解について、「授業担当者打ち合わせ会」・科目系列ごとの分科会において、丁寧に対応している。 ⑥保育フェスティバルは地域に開かれた素晴らしい行事で、長き伝統を有し、しかも主に1年生中心の行事であることは特筆すべきである。	①各学科ともに、獲得される「学習成果」の検討は今後の課題とされており、その設定と評価、査定の実践が早急に求められる。 ②シラバスの「到達目標」の査定に関して、具体的データへの切り替えと、その可視化が望まれる。また、兼任講師との連絡調整をさらに密にすることや、シラバスに関する連絡会の開催時期を検討することが期待される。 ③学生による授業評価に対する教員の考察や反省等の集約とまとめを行う必要があるのではないかと。 ④卒業生に対する職場からの外部評価を今後組織的に行うことが期待される。 ⑤現代コミュニケーション科は学科の特徴も異なり、同等のイベントは難しいと思われるが、何か地域との連携をアピールできるイベントの開催を期待したい。 ⑥ディプロマ、カリキュラム、アドミッションの各基本方針に関して、早期に全学的議論を行い、設定する必要がある。
基準Ⅱ 教育課程と学生支援	①Basic Studying でリメディアル教育を、Career Studying で採用試験対策を、カリキュラム内に単位として組み込むことで、学生にとっても実質的なサービスを提供している。 ②新設された「保育演習棟」での実際の保育室を想定した実践的な指導が大いに期待される。 ③垣根の低い教育課程の設定により、学生の自発的で積極的な学習機会を増やしている。 ④現代コミュニケーション科で在学中4学期すべてにわたって「キャリアプランニングⅠ～Ⅳ」を必修とし、キャリア教育や就活対策に包括的に取り組む、その態勢と覚悟は素晴らしい。 ⑤キャリアプランニングⅠ～Ⅳの授業では、キャリアカウンセラー・キャリアサポート室との連携による指導が効果的に行われている。	①転学科制度の効果について、続けて検証されたい。 ②保育学科で「不本意入学」に相当するケースが増えているので、志願時点での明確な意思決定となるよう広報の工夫が求められる。 ③成績評価に科目間のバラツキが見られるので、とくに「秀」の評価等について共通理解を図る必要があるのではないかと。 ④現代コミュニケーション学科における基礎科目に不可が多く見られることについて、改善が必要ではないかと。 ⑤学生の資格検定への需要は高いとお聞きするが、大学実務教育協会認定資格以外の検定試験については、合格や取得に向けた授業態勢や支援を一層拡大されるよう検討されたい。 ⑥資格取得と学科本来の目的の関係について、関連教職員で共通理解を図る

	<p>⑥現代コミュニケーション学科では、「現代コミュニケーション論」「情報コミュニケーション論」「心理コミュニケーション論」を開講し、コミュニケーションの基礎的知識を理解させており、それらをもとにして他のコース関連科目や資格関連科目で応用的な「コミュニケーションする力」を育成している。</p> <p>⑦保育学科でのいわゆる不本意入学に対する「転科」制度が活用されつつあり、学生にとっての不利益を最小限にとどめようとしている。</p> <p>⑧現代コミュニケーション科では、学科の枠を越えて保育学科の協力を得て、幼稚園教諭2種免許状を取得できる態勢を構築していることは素晴らしい。</p> <p>⑨難関の国家資格である「国内旅行業務取扱管理者」の合格者を着実に出していることが、またその試験の受験者が一定数いることがすばらしい。授業との連携がうまくいっているものと思われる。</p> <p>⑩現代コミュニケーション学科では、平成25年度よりスポーツ科学コースを新設するなど、地域のニーズに柔軟かつ機敏に対応し、定員確保にむけた不断の努力を重ねている。</p> <p>⑪「アチーブメントテスト」と Basic Studying とがよく連動し、学生の基礎学力の保証に役立っている。</p> <p>⑫入学前教育の取り組みが優れている。自前の自習用ドリルに始まり、A0入試合格者への対応、入学後のアチーブメントテストでのチェック、Basic Studying 履修への接続など、組織的で十分機能している。</p> <p>⑬学生指導委員会の学生支援体制が整備されており、クラブ活動、学生会活動の活性化に繋がっている。</p> <p>⑭サークル活動は、その数字のみならず、体育館内に並ぶ部室や、合宿室、グラウンドわきの和太鼓専用プレハブなど、十分学生目線で対応しているように見える。</p> <p>⑮学生食堂や学生用化粧室は明るく清潔感が感じられ、学生が使用しやすいスペースとなっている。</p> <p>⑯指導者や様々な支援に支えられ、クラブ活動状況は、クラブ数、参加人数とも活発に行われている。ことにハイアン、和太鼓クラブは、地域への文化的貢献が大である。</p> <p>⑰420台分の無料駐車場の完備やス</p>	<p>必要があるのではないかと考えられる。</p> <p>⑦1単位科目が多いため、カリキュラムや時間割が過密かつ固定化される傾向にあるので、科目数と単位数を整理し、より有効な科目編成となるよう検討されたい。</p> <p>⑧心理的な悩みに関して、保健室で助言対応しているが障害のある学生のみならず、現在の学生を良く理解する視点からも支援体制づくりを検討する必要がある。</p> <p>⑨奨学金制度について、日本学生支援機構の制度利用者は、有効に利用しているが大学独自の給付型、貸与型も検討する必要があるのではと感じる。</p> <p>⑩求人開拓にも出かけられるのをお聞きした。地域的な問題もあると考えられるが、企業で補充人事があった場合、まず自分のところと連絡してもらい、求人をいただけるような連携を確立できるとよいと思われる。</p> <p>⑪情報システムに関する独立した組織はないとのことだが、事務局で管理運用を担当することには限界がある。特に新しい環境への移行については、専門性があるだけでなく学内外でリーダーシップを発揮できる人材が必要になるのではないかと考えられる。</p>
--	---	--

	<p>クールバスの長時間の運行など、学生の学習や課外活動のニーズに十分こたえる体制となっている。</p> <p>⑱健康診断について、法律で定められた最低基準を守るだけでなく血圧、尿、貧血検査を実施し学生の健康状態を把握し管理、サポートしている。</p> <p>⑲現代コミュニケーション学科のキャリアプランニングの授業で「働く」ことの意味の考察や、仕事観や職業観を養い、キャリア形成や早期離職率の低下を工夫している。</p> <p>⑳保育学科の就職率の高さは素晴らしい。</p> <p>㉑キャリアサポート室が学生にとってアクセスしやすい環境であり、担当の職員の方が専門性を持って個別相談に取り組んでいる。授業と連携した履歴書の指導では、授業で作成したものをキャリアサポート室に提出し、そこでコンサルタントの方が添削していく、という具体的な連携がなされている。日々の支援については、実績値を克明に記録し、支援体制の検討に役立てている。</p> <p>㉒既存の情報システムおよびネットワークを効果的に用いて授業を行っている。学内に情報を提示するディスプレイを設置するなど、情報発信にも有効活用されている。</p>	
<p>基準Ⅲ 教育資源と財的資源</p>	<p>①演習棟の新設、学生食堂、トイレ等も内装も明るく、かわいいイメージの改修等が計画的に実施できている。</p> <p>②体育館及びグラウンドは、広く使用しやすい施設となっている。</p> <p>③図書館は「学ぶ図書館」、「楽しむ図書館」のコンセプトを追求し、「読みたい100冊」冊子など作成しながら、学生に対して図書購読を積極的に働きかけている。</p> <p>④図書館の貸し出し図書の冊数について、長期休暇中は無制限とし、学生の便宜を図っている。</p> <p>⑤現代コミュニケーション学科、保育学科ともに必要な演習室、教室設備を充実させ、授業内容の幅を持たせている。</p> <p>⑥事務職員の人事異動と配置が事務職員の活性化につながっていると同時に、時間外勤務管理制度を整備し、時間外勤務時間の削減の実績を上げている。</p> <p>⑦Floor Guide、電子掲示板の設置がされていてわかりやすい。</p>	<p>①無線 LAN の設置、CALL の更新など、PC 環境の向上が必要と思われる。</p> <p>②情報システムの管理運用部署を独立して設定する必要があるのではないか。</p> <p>③学内には、ちょっとした段差及び階段がありますが、障害のある学生、職員等の今後の受け入れに対応できるようにバリアフリー化の検討が必要と思われる。</p>

<p>基準Ⅳ リーダーシップ とガバナンス</p>	<p>①「男女共学化」という重要テーマについて学内で十分な議論を尽くし、学長のリーダーシップと決断によって導入された。 ②これまで「比較的安定を欠いていた教員組織」が課題とされてきたが、採用の見直しによって若手、中堅教員の増員を図り、バランスのとれた教員構成となっている。</p>	<p>①教授会の欠席者が毎回多い理由は不明だが、調整の上全員出席をめざすべきではないか。 ②学科会議への欠席者が複数名いる回があるので、事前の調整が必要ではないかと感じた。</p>
<p>選択的評価基準</p>	<p>①現代コミュニケーション科において、10週間、4週間プログラムなど充実したプログラムを実施している。英語コミュニケーション力への効果が期待できる。 ②保育学科における保育活動視察・園児との交流プログラムへの参加者も多く、特徴あるプログラムとして定着している。学生の関心度も高く意欲的に参加していることから成果も期待できる。 ③リカレント講座として、現場の保育者を対象とした講座が充実しており、保育現場への貢献も期待できる取り組みである。 ④幼児教育研究所主催の公開講座「子どもあそび広場」は地域の子育て支援等に大きく貢献している。また、ぐんま県民カレッジとの連携講座として、地域との協力体制のもと地域連携を図ろうとしている。 ⑤学生の出前公演を積極的に支援しており、地域との連携強化また学生の体験の場として期待できる。</p>	<p>①事務局は少数で非常に効率よく業務にあたっておられるように見えるが、国際交流と並んで地域連携の分野でも、さらに活動を広げるためには事務局内にそれぞれの分野で専従できる人員を確保すべきではないか。</p>

9. 議事録

(1) 第1回事前打ち合わせ会議事録

育英短期大学・清泉女学院短期大学
相互評価に関する第1回打ち合わせ会 議事録

◆日 時 平成24年3月6日(火) 13:30～16:00

◆場 所 清泉女学院短期大学 M203 会議室

◆出席者 (敬称略)

育英短期大学

小野澤正喜 AL0・現代コミュニケーション学科教授・教務部長

遠藤 邦男 教務課 主任

清泉女学院短期大学

西山 薫 副学長・自己点検評価委員長

中村 洋一 AL0・自己点検評価委員

西村 健一 自己点検評価委員

西澤みゆき 自己点検評価委員

司 会 中村洋一 記録 西澤みゆき

◆議 事 (学校名、敬称略)

両校の第三者評価、相互評価についての確認

- ・育英短大 第三者評価は平成26年度に短期大学基準協会にて実施予定。
- ・清泉短大 第三者評価は平成26年度に短期大学基準協会にて実施予定。

(1) 相互評価実施要項(案) (別紙)の検討

- ・「3. 評価項目・内容」については、新マニュアルの基準Ⅰ、Ⅱ及び選択的基準を中心に行い、法人、財務については参考程度にする。

(2) 相互評価協定承諾書(案) (別紙)の検討

- ・承諾書の書式は文案どおりとし、承諾書データは清泉短大より育英短大へ送信し、4月初旬に押印した承諾書を相互に郵送で取り交わすこととする。

(3) 今後の予定

① 平成24年4月初旬

- ・相互評価協定承諾書調印 (郵送)
- ・相互評価委員名簿およびワーキンググループ名簿交換。
- ・相互評価報告書作成メンバーで役割分担等を打ち合わせ (メール)。

- ② 平成 24 年 7 月 上旬 平成 23 年度自己点検評価報告書及び関連資料の交換（郵送）
 - ③ 平成 24 年 9 月 下旬 相互に質問状送付（メール）
 - ④ 平成 24 年 10 月 26 日 第一回相互評価委員会 会場校（清泉短大）
 - ⑤ 平成 24 年 12 月 14 日 第二回相互評価委員会 会場校（育英短大）
 - ・日程（案）は各学校で調整のうえ相互に連絡し、決定する。
 - ・理事長は挨拶のみで、委員会はメンバーで行う。（会場：育英短大）
 - ・第二回相互評価後に懇親会を設ける。
- (5) 報告書の作成について
- ・原稿取りまとめ、印刷（清泉短大）
 - ・打ち合わせ 12 月
- (6) その他
- ・事前回答と会議の回答について重複するため、会議での回答は補足説明として記載する。

(4) 交換資料

★育英短大

- ・自己点検・評価報告（平成 21 年度）
- ・シラバス、学生必携
- ・大学案内（2012 年度）
- ・スポーツ科学コース、保育フェスティバル、英語留学コース、公開講座、クラブ活動状況、学科ユニット等

★清泉短大

- ・自己点検・評価報告書（平成 22 年度）
- ・学生便覧、シラバス
- ・大学案内（2012 年度）
- ・入試要項
- ・カレッジ通信
- ・研究紀要

(2) 第1回相互評価委員会議事録

育英短期大学・清泉女学院短期大学 第1回相互評価委員会 議事録

- ◆日 時 平成24年10月26日(金) 10:00~16:00
- ◆場 所 清泉女学院短期大学 S301 会議室・S206 (昼食会場)
- ◆出席者 (敬称略)

育英短期大学

小野澤正喜 副学長・現代コミュニケーション学科教授・ALO・図書館長
小野澤 昇 保育学科教授・学科長
小池 庸生 現代コミュニケーション学科教授・学科長
堤 大輔 保育学科教授・教務部長
大佐古紀雄 保育学科准教授
泉水 清志 現代コミュニケーション学科准教授
高橋 惣平 事務局教務課長・ALO 補佐
遠藤 邦男 事務局教務課主任

清泉女学院短期大学

吉川 武彦 学長
西山 薫 副学長・幼児教育科教授・学科長
中村 洋一 国際コミュニケーション科教授・ALO
村田 信行 国際コミュニケーション科教授・学科長
小林 房子 幼児教育科教授・学生支援部長
小林 敏枝 幼児教育科教授・地域連携センター長
田中 秀明 幼児教育科教授・教務委員長
長田 尚子 国際コミュニケーション科准教授・キャリア支援センター長
八重田 修 事務局長
西村 健一 事務局次長
宮坂 廣司 事務局次長
西澤みゆき 入試・企画広報室主任・ALO 補佐

司 会 中村洋一 記録 西澤みゆき

◆議 題

1. キャンパス内施設見学
2. 清泉女学院短期大学長の挨拶及び出席者による自己紹介
3. 育英短期大学・ALOの挨拶及び出席者による自己紹介
4. 育英短期大学からの事前の照会・質問に対する清泉女学院短期大学からの回答
5. 全体の質疑応答
6. 育英短期大学からの感想

1. キャンパス内施設見学

下記のルートでキャンパス内の施設見学を行った。

会場（ソフィア館3階）出発→①フランシスコ館（3階大教室・情報処理室、2階講義室）→②聖心館→③マリア館（1階事務室、2階事務室、学生相談室、美術室）→④ヨゼフ館（3階大講義室、2階、1階図書館）→⑤体育館→⑥ラファエラ館（2階講義室、ホットルーム、1階昇降口）→⑦セシリア館（音楽堂、ピアノ練習室）→⑧カフェテリア→マリアン・ホール→⑨生協→⑩パウロ館（2階CALL教室、3階情報処理室、情報システム室）→会場戻り

2. 清泉女学院大学長、育英短期大学AL0の挨拶及び出席者による自己紹介

(11:00～11:15)

清泉女学院短期大学より吉川学長から挨拶がなされ、次に育英短期大学より小野澤AL0から挨拶がなされた。続いて、清泉女学院短期大学側の出席者と育英短期大学側の出席者より自己紹介がなされた。

3. 育英短期大学から清泉女学院短期大学への質問事項と回答

(1) 11:15～12:15

基準Ⅰ 建学の精神と教育効果

基準Ⅱ 教育課程と学生支援

(2) 12:15～13:00 昼食・休憩

(3) 13:00～14:15

基準Ⅲ 教育資源と財的資源

基準Ⅳ リーダーシップとガバナンス

選択的評価基準

(4) 14:15～14:30 休憩

(5) 14:30～15:30

全体を通しての質疑応答



会議の様子

4. 育英短期大学からの感想

(15:30～15:50)

16:00 終了



学内見学の様子



第1回相互評価集合写真

(3) 第2回相互評価委員会議事録

育英短期大学・清泉女学院短期大学 第2回相互評価委員会 議事録

◆日 時 平成24年12月14日(金) 10:00~16:00

◆場 所 育英短期大学 大会議室

◆出席者 (敬称略)

清泉女学院短期大学

吉川 武彦	学長
西山 薫	副学長・幼児教育科教授・学科長
中村 洋一	国際コミュニケーション科教授・ALO
村田 信行	国際コミュニケーション科教授・学科長
小林 房子	幼児教育科教授・学生支援部長
小林 敏枝	幼児教育科教授・地域連携センター長
長田 尚子	国際コミュニケーション科准教授・キャリア支援センター長
西村 健一	事務局次長
西澤 みゆき	入試・企画広報室主任・ALO 補佐

育英短期大学

三村 満夫	学長
小野澤正喜	副学長・現代コミュニケーション学科教授・ALO・図書館長
小野澤 昇	保育学科教授・学科長
小池 庸生	現代コミュニケーション学科教授・学科長
堤 大輔	保育学科教授・教務部長
松本 尚	保育学科教授・学生部長
早川 史郎	保育学科教授・幼児教育研究所長
泉水 清志	現代コミュニケーション学科准教授
大佐古紀雄	保育学科准教授
三浦 哲也	現代コミュニケーション学科准教授
大島 宗哲	現代コミュニケーション学科講師
栗名 正光	事務局長
高橋 惣平	事務局教務課長・ALO 補佐
遠藤 邦男	事務局教務課主任

司 会 小野澤正喜 記録 遠藤 邦男

◆議 題

1. キャンパス内施設見学
2. 育英短期大学長、育英短期大学・ALO、清泉女学院短期大学長、清泉女学院短期大学・ALO の挨拶及び出席者による自己紹介
3. 清泉女学院短期大学から育英短期大学への質問事項及び回答を踏まえた補足質

問と回答

4. 清泉女学院短期大学からの感想

1. キャンパス内施設見学 (10:00～10:45)

下記のルートにてキャンパス内の施設見学を行った。

短大会議室出発 → ①キャリアサポート室 → ②小児栄養実習室 → ③絵画実習室 → ④大講義室 → ⑤音楽室 → ⑥ピアノレッスン室 → ⑦リズム室 → ⑧体育館 → ⑨和太鼓部室 → ⑩演習棟 → ⑪ラウンジ・学生食堂 → ⑫第二PC室 → ⑬中講義室 → ⑭観光演習室 → ⑮心理実験室 → ⑯普通教室 → ⑰チャットラウンジ → ⑱第一PC室 → ⑲図書館 → 短大会議室到着

2. 育英短期大学長、育英短期大学・ALO、清泉女学院短期大学長、清泉女学院短期大学・ALOの挨拶及び出席者による自己紹介 (10:45～11:00)

育英短期大学より、三村学長、小野澤正喜 ALO から挨拶がなされ、次に清泉女学院短期大学より吉川学長、中村 ALO から挨拶がなされた。続いて、育英短期大学側の出席者と清泉女学院短期大学側の出席者より自己紹介がなされた。

3. 清泉女学院短期大学から育英短期大学への質問事項及び回答を踏まえた補足質問と回答

既に清泉女学院短期大学より送付されている質問事項に対する回答及び補足質問に対する回答が、以下のプログラムの流れに基づきなされた。

(1) 11:00～12:10

基準Ⅰ 建学の精神と教育効果

基準Ⅲ 教育資源と財的資源

基準Ⅳ リーダーシップとガバナンス

(2) 12:10～13:00 昼食・休憩

(3) 13:00～14:15

基準Ⅱ 教育課程と学生支援

選択的評価基準

(4) 14:15～14:30 休憩

(5) 14:30～15:30 全体を通しての質疑応答



第2回相互評価委員会 集合写真



第2回相互評価委員会
キャンパス見学風景

4. 清泉女学院短期大学からの感想 (15:30～15:50)

最後に育英短期大学側から終了の挨拶がなされ、全ての議事を 15:50 に終了した。

あとがき

多くの関係者のご協力により、ここに清泉女学院短期大学と育英短期大学との間で平成 24 年度に実施された相互評価の報告がまとめられました。

両短期大学は多くの面で共通性をもち、短期大学が厳しい局面を迎えている中で緊密な情報交換と協力の体制を組んできております。両校は既に平成 18 年度に相互評価をこころみ、広範な分野で多くのことを学び、改善すべき事柄を確認いたしました。今回の相互評価は 8 年間の両校の改善の努力を再確認し、併せて第 2 次の第三者評価に向けた取り組みに万全を期す意味を持って執り行われました。

1 年余りにわたる真摯な作業を通じて両校が進めている教育改革の実績をつぶさに観察し、資料を検討させていただく中で多くのことを学ぶことができました。また毎年行っている自己点検・評価の作業では見落としていた比較の視点からする特徴点、弱点、課題等に気づくことができたことから、「第三者のまなざし」から検証を行うことの意義につき認識を改めた次第であります。

更に今回の取り組みでは 8 年前の相互評価とほぼ同一のパターンでの作業を行いました。それによって巧まずして時間軸を織り込んだ定点観測の実を挙げるという想定以上の成果をあげることができたと思われ。現在この厳しい環境の中で両校が生命力に溢れ、成長過程にある存在として大きくはばたき、地域社会にしっかりと根を張ってきていることを確認できました。今後の中長期の学園の将来構想を立てる上でも確乎とした裏付けになっていくものと思われ。

相互訪問、数次の会合、多数の文書往復等を含む作業の過程で示された両校の教職員の皆様の暖かいご配慮とご尽力によって、今回の相互評価が前回の取り組みにも増して豊かな成果がもたらされたことにつき深い感謝を申し上げます。

上記のような多くの側面において意義深い作業が進められ、その結果を結集したものが本報告書であります。各方面からの忌憚のないご指導ご助言をいただければ幸いです。

育英短期大学

学長 三 村 満 夫

相互評価報告書編集委員会

育英短期大学

小野澤 正喜 泉水 清志 大佐古 紀雄 遠藤 邦男

清泉女学院短期大学

西山 薫 中村 洋一 西澤みゆき

育英短期大学・清泉女学院短期大学

相互評価報告書

平成 25 年 3 月 31 日

発行者

育英短期大学・清泉女学院短期大学 相互評価委員会

育英短期大学 <http://www.ikuei-g.ac.jp>

〒370-0011 群馬県高崎市京目町 1656-1

清泉女学院短期大学 <http://www.seisen-jc.jp>

〒381-0085 長野県長野市上野 2-120-8